

よさこい祭り

短 17 (昭 52 年卒)

右城 猛

(株)第一コンサルタンツ

専務取締役



よっちょれよ よっちょれよ
よっちょれ よっちょれ よっちょれよ
よっちょれ よっちょれ よっちょれよ
高知の城下へ 来てみや
じんばも ばんばも よう踊る よう踊る
鳴子両手に よう踊る よう踊る

毎年 8 月 9 日～12 日には「よさこい鳴子踊り」の曲が流れ、高知市は街中が祭り一色に包まれる。9 日が前夜祭、10 日と 11 日が本番、そして 12 日が後夜祭と納涼花火大会である。53 回目となった今年の「よさこい祭り」は、高知市内の 15 箇所に設けられた競演場と演舞場で 170 チーム、約 1 万 7000 人の踊り子が鳴子を両手に、真夏の太陽の下で声を枯らし、身を焦がして乱舞した。

戦後の不況を吹き飛ばし、夏枯れの商店街の振興を促すことと、市民の健康と繁栄を祈願するため、昭和 29 年に高知商工会議所が中心となって始めた祭りであるが、札幌の「YOSAKOIソーラン祭り」、埼玉県朝霞市の「関八州よさこいフェスタ」、原宿表参道の「元気祭スーパーよさこい」などに見られるように、全国各地で本家高知を凌ぐような「よさこい祭り」が次々と誕生している。

鳴子踊りの魅力は、ルールが少なく自由度が高いこと。よさこい節の入った曲で、鳴子を持って踊るだけ。それさえ守れば衣装も、振り付けも、音楽

も自由にやり放題。いかにも高知らしい、それが若者を惹きつけて止まないのだろう。

高知に帰ってきて 20 年が経つ。鳴子踊りをじっくり見たことは一度もなかった。昨年、補償コンサルタント協会が発刊している月刊誌のグラビアを飾る写真を撮る必要があったので、本番の 2 日間カメラを携えて演舞場に行った。以来、鳴子踊りをカメラに納めるのが私の楽しみの一つになった。

私にダンスの知識はまったくない。リズム感もない。しかしファインダー越しに眺めると、踊り子の発するエネルギーが増幅され、大きな波動となって私の体内に伝わってくるのを感じる。波動の大きさは、踊り子の笑顔、躍動感、容姿によって決まってくる。気に入った美人の踊り子が目にとまると、思わずシャッターを押す指に力がこもる。知人や身内となれば理屈抜きに興奮する。

今年は、この春に大学を卒業して社会人になった私の下の娘も踊り子の中にいたので、妻と一緒にデジカメとビデオカメラを携えて「追っかけ」をした。娘をビデオカメラで追ったのは、小学校の運動会以来である。本番二日目の夕方には、長女も職場から駆けつけた。家族にとって思い出に残る楽しい盆休みとなった。

その一方で今年の「よさこい祭り」を寂しく感じた。土木業界から 1 チームも参加がなかったのである。建設業の衰退を見せつけられる思いがした。

いつの日か、我が社の社員とその家族が一緒になって、鳴子を両手に大空に舞い上がる姿を見られる日が来ることを夢見ている。



日本総合警備保障のチームで踊る私の娘

(徳島大学 美土利会会報)